

目次

第5回通常総会報告	1
研究発表会	2
招待講演Ⅰ(熊谷氏)	2
招待講演Ⅱ(山中氏)	3
研究発表会	4
都市計画サロン	6
三井所清典氏	6
第2回学術講演会	7
「都市計画と教育」シリーズ(植村氏、鶴氏)	7
ホットコーナー	9
昭和レトロを訪ねて	9
会員紹介	11
山中英生氏	11
今後の活動計画	11
編集後記	11

第5回通常総会(平成19年度)報告

1. 日時

平成19(2007)年5月19日(土)13:50~14:20

2. 会場

ホテル法華クラブ広島10階会議室
(広島市中区中町7-7)

3. 会議の概要及び議決の結果

(1) 総会の成立報告

司会の佐伯幹事から、議決権を有する正会員230名中、本人出席40名、委任状による出席56名、合計96名出席があり、支部規定第12条の要件、支部所属の正会員の1/5以上の出席を満たしていることから、総会が成立する旨の報告があった。

(2) 議長選出

議事に先立ち、支部規定の第7条により杉恵支部長が議長として選出された。

また、佐藤幹事と山下幹事に議事録署名人としての承認を得た。

(3) 議事

1) 第1号議案—平成18年度事業報告

近藤副支部長が、会員及び役員の現状、会議、支部研究発表会、都市計画研究会、地域活動助成等の事業実績について説明し、拍手多数により承認された。



杉恵支部長



近藤副支部長

2) 第2号議案—平成18年度収支決算

佐藤幹事(総務委員長)が、平成18年度収支決算についての説明、続いて今田監査役から収支決算に対する監査報告があり、拍手多数により承認された。

3) 第3号議案—平成19年度事業計画及び収支予算

松波副支部長が、平成19年度事業計画及び平成19年度収支予算書(案)について説明し、ともに、拍手多数により承認された。(下表参照)



松波副支部長

《19年度事業計画について》

1. 会員の現状:前年度より正会員5名増加(正会員230名、学生・外国人会員11名、賛助会員10団体)
2. 第5回支部研究発表会の開催、都市計画研究講演集5の発行
3. 学術講演会:18年度に引き続き「都市計画と教育」を共通テーマとして3回開催
4. 支部連携行事—中国・四国リレーシンポジウム“公共空間とまちづくり”—:岡山市、徳島市、高知市、広島市で開催、広島会場では、「街づくり相談コーナー」を開設する
5. 都市計画研究会:3回程度開催
6. 講演会・シンポジウム・講習会・見学会等:
 - 特別講演会:1回開催
 - 都市計画サロン:3回程度開催
 - 見学会:支部連携行事を見学会の代替とする
 - シンポジウム等:支部連携行事として開催する
7. 地域活動助成:支部連携行事として開催する
8. 総務活動
 - 会員への連絡
 - ニュースレターの発行:4回程度発行
 - 各種事業の後援手続き
 - 「支部たより」の発信
 - ホームページの開設と管理
 - 都市計画CPD制度の実施

《19年度収支予算》

- 予算額:1,005,853円
- 支部連携行事予算額:735,421円

(4) その他

杉恵支部長より、本支部の活動に関して、ニュースレターをはじめ、積極的な活動状況について本部から高い評価を受けているとの報告があった。

(文責:佐伯達郎)

■第 5 回中四国支部研究発表会

【日時: 2007 年 5 月 19 日(土) 会場: 法華クラブ】

I. 中四国地域における工業都市の土地利用規制に関する研究

石村壽浩(山口大学大学院博士課程)

中国地方における工業都市の土地利用規制状況を明らかにし、線引き制度廃止都市の土地利用の実態から、今後の検討課題を明らかにする。ケーススタディでは、愛媛県東予区域都市計画区域



(西条市、新居浜市) を取り上げ、①新たな土地利用規制(特定用途制限地域指定、開発許可対象面積の引き下げ、形態規制の見直し)の現状、②土地利用動向(農地転用・開発行為の増加)の状況、及びこの分布状況が報告された。工業系都市では、広域的に線引き制度が運用されており、近年では工業用地の集約が進み、商業や住宅利用の需要が高まっているため、線引き廃止後は、土地利用動向を細かく把握しながら、地域の実情に応じた土地利用コントロールが必要であることが認識された。会場からの質問では「線引き廃止が本当に有効か」「乱開発を誘発していないか」「工業系の需要が低くなる中、新しい地域の土地利用の方針が示される必要性」等の指摘があった。

II. 防災に関するソフト的施策を評価するための津波避難シミュレーションモデルの開発

渡辺公次郎(徳島大学大学院助教授)

南海、東南海地震の発生に備え、道路や建物の改修といったハード面の整備でなく、住民の防災意識の向上や避難の呼びかけ等、ソフト的施策の実施が有効であり、その効果を計測するためのモデルを開発する。地震発生による津波



や建物倒壊等を周辺空間「環境」とし、避難者を「エージェント」と考えて、マルチエージェントシステム(MAS)でモデル化した。徳島県海陽町鞆浦地区を舞台として、エージェントの歩行速度の違い、市街地の道路閉塞状態を考慮し、避難勧告、警報発令の実施の有無、この実施時間等の違いから 7 つのケースを想定した。何ももしない場合では、3 割の住民が時間内避難ができないが、各種対策や呼びかけ等は避難効率をあげることがわかった。課題として高齢者の疲労への対応、避難介助者が必要である等、避難を支援する仕組みが必要であり、防災上の問題を事前に把握し、将来はGISに組み込むなどの充実がある。会場からは、「シミュレーションが実態とどの程度の違いがあるか、避難成功率は高くないか」「実態は個々ではなく、集団で避難行動する場合が多いのでは」などの指摘があった。

(文責: 宮迫勇次)

III. 視覚障害者のための音声案内システム整備に関する基本的調査研究—鳥取県境港市水木しげるロードの事例—

福井美弥(和歌山大学大学院システム工学研究科修士課程)

本研究は視覚障害者の視点から、鳥取県境港市の人気をあつめている「水木しげるロード」における音声案内システムの現状把握と今後の課題



に関して検討がなされたものである。調査は障害者の方々の協力を得て、①ヒアリング調査(29 人)、②点字アンケート調査(鳥取県内 139 人、51 名が回答)、③モニタリング調査(39 人)が 2006 年 12 月から 2007 年 3 月にかけて実施されている。調査の結果、①では視覚障害者の方々は音声案内のわかりやすさと点字ブロック上の妨害物等の除去が求められており、②では回答者の半数は水木しげるロードを訪問しているが、訪問していない人の課題として、行きたいが付き添いがいないや機会がないが挙げられた。③ではバリアフリーの店舗情報の不足やラジオの音声案内の聞き取りにくさが課題として指摘された。

質疑応答の中では、音声案内等のハード面だけでなくソフトの充実が重要ではという指摘があったが、発表者の福井さんからも、特に視覚障害者の方々の受け入れ体制が非常に重要とのコメントがあった。(文責: 安永洋一郎)

IV. 米子市旧加茂川・寺町周辺地区における官・民・学協働による案内施設の計画に関する研究

川口洸葵(神戸大学大学院工学研究科修士課程)

本研究は、江戸時代の町割の形態を伝える貴重な歴史地区である米子市内の旧加茂川・寺町周辺地区において、住民の方々と 5 回(2005 年 9 月~2006 年 2 月)のワークショップを通じて地区の案内施設のデザイン検討がなされたものである。



従来の案内施設設計の場合、配置やデザインについて住民の方々と検討するプロセスは、殆どないままに計画・設置されることが多かったが、今回のワークショップという協働の試みで、設置前の合意形成には一定の期間が必要でありかつ地区のためにはその過程が重要であることが住民・学生・行政で共有できた。

この中で、入口・誘導サイン、誘導サインに関しては米子高専サイン計画グループがワークショップの協働の成果として実物大模型を作成し、実際の配置すべき場所に設置する試みが行われ、住民の方々並びに行政から高い評価を得たことが報告された。

質疑応答では木材をサインに使用した場合の薬剤注入による維持管理費の低減や、地区住民のみならず外部の市民や観光客の立場にたった総合案内の検討の必要性など建設的な意見が多くあった。(文責: 安永洋一郎)

V. 広島モビリティ・マネジメントの効果

藤原 章正(広島大学大学院 教授)

広島都市圏で実施されたモビリティ・マネジメント(MM)「クルマと公共交通のかしこい使い方を考えるプロジェクト・広島」を事例として、その適用結果について報告するものである。



広島都市圏を考慮した行動変容率とコミュニケーション参加率について、DEA 法により都市間比較を行うとともに到達目標を設定した。今後、他都市の事例が蓄積されることでより汎用性の高い目標設定が可能となる。

またコミュニケーションがもたらす心理的構造変化のプロセスをランダム効用理論に基づいてモデル化し、MMにより行動変容のみならず態度や意図の変容を計測できることを示した。さらに、参加行動及び行動変容の分析により、コミュニケーションへの参加率を考慮したMMの効果計測の必要性を明らかにした。

MM参加に対するインセンティブと行動変容との関係、行動変容の継続性、参加者属性の分析に基づくMMの効率性向上などについて、活発な議論がされた。インセンティブとしての個別グッズのシステム化など、MMの継続に対するコストパフォーマンスが今後の課題である。

VI. 日吉津村における住民の治安意識に関する研究

藤原 研哉(大阪大学大学院修士課程)

本研究は、鳥取県日吉津村を調査対象として、地区の防犯と住民の治安に対する意識を把握することで、地区住民による安全・安心のまちづくりの基礎資料を提供することを目的とする。



調査は村内の地区代表、PTA 関係者、小学校教職員、役場職員を対象としてアンケート調査を実施した。調査内容は、「コミュニティ形成」、「防犯意識」、「犯罪危険箇所に関する情報」などである。

調査の結果、侵入盗への不安を抱く人が半数を超え、地区内の防犯の意識が高まっていることが明らかとなった。一方、近所の治安については、コミュニティが形成されていることから周辺地域の治安に比較して安心感が高まっていることが明らかとなった。不安指摘集中場所と犯罪の発生箇所は概ね一致しており、女性の不安意識が高いことが明らかとなった。また大規模ショッピングセンター周辺は、不安と安心が混在していることが特徴的である。

本研究は地区防犯に対するコミュニティ形成の重要性を示し、今後のまちづくりのあり方を示唆するものである。居住歴別の安心感、大規模ショッピングセンターの不安要因など質疑に対する今後の研究展開が期待される。

(文責 周藤浩司)

VII. 若者の中心商店街に対する満足度と地域愛着心：

高松と松山の比較調査から

高塚 創(香川大学大学院地域マネジメント研究科 准教授)

本研究では、中心市街地の大きな役割の一つである地域愛着心の形成に着目し、中心市街地の満足度や地域愛着度、Uターン・定住意識などについて、高松と松山の高校生を対象にアンケート調査を行い、差異の比較をしたうえで、それらの規定要因について分析を行った。



その結果、地域愛着度、Uターン・定住意識に関しては、当該地域の中心市街地の満足度が少なからず影響を与えていることが明らかとなった。

現在進められている丸亀町の再開発を中心とした「中心市街地活性化計画」の中で、「若者の生活への浸透」という観点が重要な視点であり、中心市街地と高松のウォータフロント部の商業地域との連携が本研究結果での留意すべき点である。

質疑応答の中で、高松と松山の市街地の空間構成の違いによる影響や中心地から離れた海辺は、高校生にとって利用しやすい距離なのか、あるいはパーソントリップとしての観点等についてのコメントがあった。中心市街地の活性化の目標設定や指標を検討する上で、重要な着眼点を示唆する興味深いテーマであった。(文責：長谷山 弘志)

VIII. 市民・子どもに対するまちづくり教育支援の軌跡と課題

篠部 裕(呉工業高等専門学校建築学科 教授)

日本建築学会の関係者が一般市民や子どもに対するまちづくりの教育支援に関して、どのように意識をもって臨んできたかを再考し、今後の課題を検討した。



建築雑誌からみた教育支援の動向については、学校教育をベースとした子どもへの教育支援を重要視する意識は高いが、市民に対する教育支援はやや希薄である。

また、教育支援に関する組織的な取り組みにおいては、各種委員会や支援制度が設立されてきたが、支援制度の有効活用への広報改善等が課題となっている。

今後のまちづくり教育支援に向けて、「専門家による市民や子どもへの啓発活動の推進」、「学生を交えたPBL方式の教育支援の実践」、「縦割りの支援から横断的・総合的な支援」等の取り組みが必要である。

質疑応答の中では、出前事業を普及させていくためには、トップダウンの押しかけのものではなく、現場と専門家をつなぐコーディネータが必要であることや、PBL方式の教育支援においては、学生の果たす役割は大きく、子どもたちの生活の中での問題を取り上げていくことの必要性などのコメントがあった。今後、関連する学協会等の連携した取り組みの活発化が期待される。(文責：長谷山 弘志)

■第 2 回学術講演会(「都市計画と教育」シリーズ)

日本都市計画学会中国四国支部

テーマ「地方大学による「まちなか研究室」の活動とまちづくり教育」

□ 日時：平成 19 年 6 月 3 日 (日) 13:30~17:20

□ 会場：宇部コミュニティーセンター

□ 参加者：約 30 名

□ プログラム

○「宇部市の協働によるまちづくり施策」植村 俊明氏 (宇部市都市開発部まちづくり推進課課長)

○「地方大学による「まちなか研究室」の活動とまちづくり教育」 鷗 心治氏 (山口大学大学院准教授)

○現地視察 (宇部まちなか研究室, 商店街, 区画整理地区)

土地利用により、良好な居住環境と賑わいの創出並びに防災面の向上を図ることを目的とし、民間 (地元) 主導で行う建物の共同化及び協調化による上物整備と併せて、道路の拡幅、広場の整備、宅地の整形化等の基盤整備と土地区画整理事業を行った。

本事業でまちなか研究室は、模型作成や都市空間イメージ共有システムを開発する等、ワークショップ支援を行っている。計画案を 3 次元的なイメージとして提示することで、住民の方々も内容を把握し易かったと考えられる。

事業前の中央町三丁目地区の人口は 66 人で、高齢化や空洞化が顕著であったが、現在人口は約 200 人にまで回復し、子供たちの姿も見られるようになった。また、近年の中心市街地全体の人口も徐々にではあるが回復傾向にあり、本事業が大きな原動力のひとつになっている。



写真 (左). 完成予想模型

図 1 (右). 中央町 3 丁目地区土地区画整理事業平面図

「宇部市の協働によるまちづくり施策」

植村 俊明氏 (宇部市都市開発部まちづくり推進課課長)



「地方大学による「まちなか研究室」の活動とまちづくり教育」

鷗 心治氏 (山口大学大学院准教授)



1. 宇部市と「まちなか研究室」の連携

山口県宇部市の中心市街地は、かつての活力を失い、商業機能の低下、人口流出などから市街地の空洞化が顕著となっており、これまで構築してきた都市機能の維持が困難になっている。

このような状況下で、まちづくりを実現するためには、行政と地域とのパートナーシップは欠かすことが出来ない。

「まちなか研究室」は、行政と地域を結ぶ役割を担っており、これまで以下のプロジェクトを協働で行ってきた。

- 宇部市都市計画マスタープラン策定市民参加ワークショップ支援
- 琴芝地区まちなみ環境整備事業基礎調査
- 景観ビジョン策定ワークショップ支援
- 駐車場有効活用プロジェクト策定支援

2. 中央町三丁目土地区画整理事業での協働

空洞化が顕著な中心市街地の改善に向け、平成 12 年 3 月に「中心市街地活性化基本計画」を策定。中心市街地の整備改善のための事業として 7 つの事業を掲げ、現在は中央町地区の整備、宇部新川駅沖ノ山線の整備、景観の整備の 3 つに取り組んでいる。

中心市街地のなかで、基盤整備が不十分で建物が老朽化している地区のである中央町三丁目地区では、効率的な土

1. まちづくり活動とまちづくり教育

宇部市中心市街地活性化基本計画で位置づけられている中心市街地は 140ha。このエリアは過去 25 年間で人口が半分以下の 5906 人となり、高齢者割合は 2 倍以上に増加している。このような空洞化した中心市街地に「まちなか研究室」を設置。住民、行政、商店街、NPO、建築士会が連携した、修復型・参加型のまちづくりに取り組んでいる。

「地域に立地する大学は地方都市に対し、何ができるのか？」行政、商店街、自治会、NPO と議論を繰り返すなかで、まずは持続的なまちづくりに向けたサポート体制を確立すべきだという結論に至った。まちなか研究室を教員と学生の「生活の拠点」として位置づけ、地域の一員としてまちづくりに取り組むことで、地域が潜在的に持つ人材やアイデアを顕在化させるネットワーク体制を構築しよう

と考えたのである。

一方、研究室の学生にとっては、大学キャンパスではなく、既成市街地というフィールドを教科書として与えられることになる。机上では学ぶことのできない実践的な建築・都市計画教育を受けることで、現実の課題を体感し、日常的な住民との意見交換から提案を求めることとしている。

2. 「まちなか研究室」の地域連携の形

これまで、地域との緩やかな連携(図2:ネットワーク)を築くと共に、まちづくりのテーマ毎に強い連携(図3.4:パートナーシップ)を築いてきた。宇部市都市計画マスタープラン策定では、宇部市で初めてのワークショップ方式を企画、提案しながら支援すると共に勉強会を開催。行政と住民の橋渡し役として機能した。それ以降、まちなか研究室が果たしていた役割を地域のNPOが果たすようになり、まちなか研究室は各主体と連携しながら専門的支援を行う等、まちづくりのテーマに沿ったさまざまな「連携の形」が可能となっている。

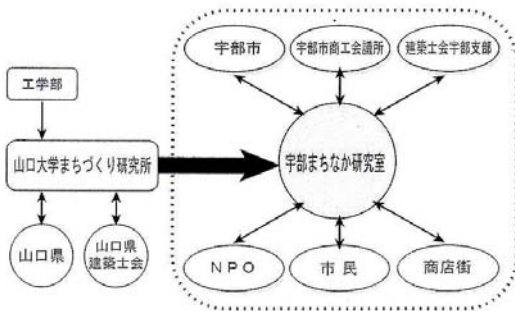


図2. まちなか研究室と地域のネットワーク

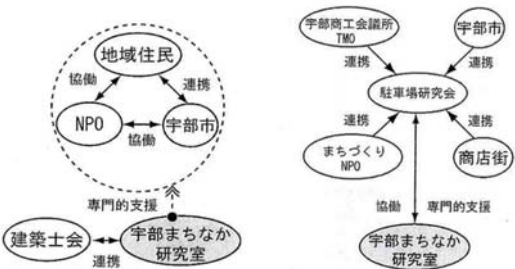


図3 (左). 琴芝地区まちなみ環境整備事業基礎調査における建築士会とのパートナーシップ

図4 (右). 駐車場有効活用プロジェクト策定におけるパートナーシップ

現地視察(宇部まちなか研究室, 商店街, 区画整理地区)

① 宇部まちなか研究室

空き店舗であった3階建てのビルを改装し、まちづくりに関心のあるオーナーから安く賃貸している。1階部分は勉強会やゼミを行うスペース、2階部分は学生が研究を行うスペース、3階部分は模型作成のスペースとなっている。特に2階は地元の木材を利用したフローリングとなっており、学生からの評判も良い。



② 商店街

「シャッター通り」と呼ばれることもある商店街。そんななか、地元NPOが昭和30年代の教室を再現した「水神様匠(しょう)学校」を開設。演劇講座、健康教室、子供を対象にした教室等ユニークな講座を開催している。



③ 中央町三丁目区画整理地区

「街づくり協定3か条」として、①屋根の形状の統一(片流れ)、②外壁の色の統一(アースカラー)、③建物1階部分のセットバック等のルールがある。また、借上公営住宅など上物整備(住宅供給)をセットで実施している。



おわりに

「都市計画と教育」シリーズの第2回目は、大学教育と都市計画の連携のあり方を示す先進事例として「まちなか研究室」を取り上げた。地方都市で山積する都市計画課題について、行政・企業・市民のなかに大学が入り込み、重要な役割を果たすための仕組みづくりについて学んだ。2名の講師以外にも宇部市役所の職員、山口大学の学生と卒業生をはじめ多くの方のご協力をいただいた。記して謝意を表す。(文責:岩永 秀樹)

ホットコーナー 昭和レトロを訪ねて

編集委員 隅田 誠

平成ももうすぐ20年を迎えるということは昭和が過ぎ去り20年近く経つことになる。近年、国際グローバル化の波にさらされ、日本の伝統的なしきたりが失われつつあり、「向こう三軒両隣」といった近隣コミュニティも失われつつある。

そうしたコミュニティが生きていた昭和30~40年代は高度成長期の真っただ中、誰もが大きな夢を抱いた時代でもあった。そういった時代が今、もてはやされているように思える。

昨年、昭和30年代を描いた映画「ALWAYS 三丁目の夕日」がヒットしたのもその現れであろう。(中国の首相も見たことで話題となり、今年続作が公開予定である。)

そういったここ数年の昭和レトロブームにあやかるうと全国の各地で昭和をテーマとした街おこしがおこなわれている。

個人的な趣味を交えて、そんな「昭和レトロを訪ねて」みた。

大分県豊後高田市「昭和の町」

まずは大分県豊後高田市の「昭和の町」と呼ばれる商店街である。

市のHPでは「江戸時代から明治、大正、昭和の30年代にかけて、豊後高田の中心商店街は国東半島一の賑やかな「お町」として栄えていた。豊後高田「昭和の町」は、この商店街が最後に元気だった時代、昭和30年代の賑わいをもう一度よみがえらせようという願いをこめて、平成13年に着手した町づくりです。」と紹介されている。

この商店街では「建築再生」、「歴史再生」、「商品再生」、「商人再生」の4つの「昭和の再生」を目指している。

実際訪ねてみるとどの店も昭和30年代にこだわり、当時、三種の神器といわれたテレビや冷蔵庫、洗濯機を店頭に表示したり、なつかしい食品を販売したりしている。

街並みは写真でご覧いただいたとおり、どの店も元のつくりは古かったのかもしれないが、改装されており、やたらと新しい。



懐かしいけどやたらと新しい街並み

その中で商店街と名物とされるアイスクャンデーの店を訪ねてみた。

店を訪ねた際、「どこから来たか」と尋ねられ、「広島から」と答えるとこの店のご主人曰く、「明治時代にご先祖様が広島からこの地に訪れて開拓した。」とのこと。広島人はハワイ、南米、北海道のみならず九州も開拓したのかと、開拓精神旺盛な県民であったことを改めて痛感したのであった。

なお、ここのアイスクャンデーが懐かしい味であったことは言うまでもない。



アイスクャンデーのいい店

次に「昭和なつかしの学校給食」を看板メニューとしているカフェを訪ねてみた。

店構えや内装はなんの変哲もない普通の店であったが、早速、その給食メニューを注文した。それが下の写真であり、「商品再生」の一品である。

メニューは揚げパン、クジラの竜田揚げ、サラダ、フルーツポンチ、牛乳である。値段は1,000円近くしたと思うがご主人曰く「クジラが高くで…」とのこと。



昭和なつかしの学校給食

思わず納得したのであった。

アルマイトの食器と先割れスプーンを使ったこだわりに大変気に入り、どれも懐かしい品々であったが唯一、「揚げパン」だけは給食メニューだったことを知らなかった。少なくとも私が育った広島市佐伯区(旧五日市町)では給食に一度も出たことがない。

この後、街のメイン施設とも言っても良い「昭和ロマン倉」を訪ねた。撮影禁止であったため、写真撮影はしていないが、昭和30~40年代を中心とした家電、映画ポスター、おもちゃ等、皆様のご想像いただける範囲の内容の展示であった。

商店街活性化の成功例として全国からの視察が相次いでいるそうだが、街並みに懐かしさがありながらも、やたらと新しいのが気になったのは私だけであろうか?

打ち合せ帰りに思いがけなく、「昭和レトロ」を堪能したのであった。

愛媛県大洲市「おはなはん通り」

打ち合わせの帰り道に立ち寄った街である。

「おはなはん通り」と呼ばれるこの通りは、江戸から明治時代にかけてできた街でNHK朝の連続ドラマ「おはなはん」の舞台になったため、その名がついたそうである。



おはなはん通り

このレポートの主旨からはずれているぞと思いきや、通りのはずれに「思ひ出倉庫」なるものを発見！

そこはなんの変哲もない古い倉庫であったが入場料を払って中へ入るとまさに！



「思ひ出倉庫」の入口

昭和レトロである。

中ではペコちゃん とニッパーが出迎えてくれたが、後は写真をご覧ください。豊後高田市の「昭和ロマン倉」と比べると小規模であったが展示品は同じようなものであった。



ペコちゃんとニッパー



駄菓子屋



台所



ポスターと広告



ミリンダとペプシの瓶



三輪トラック

広島駅近くの「愛友市場」

ふと、わか街に「昭和レトロ」な所はないだろうかと思っていたら、広島駅近くの「愛友市場」があった。

幼少の頃は「荒神市場」と呼ばれていたものでその名の方が私自身、馴染みがある。

なんの変哲もない市場であるが、戦後からの小汚さ、昔ながらの対面販売といい雰囲気が残されている。

近年、空き店舗が目立つようになり、空き店舗活用の一環で「ふれあい工房」といった市民の交流施設もつくられている。

この市場も残念ながら再開発により新たに生まれ変わるそうである。

帰りに市場の近くの純喫茶立ち寄った。

ちなみに純喫茶とは酒類を出さない純粋な喫茶店で、昭和 30~50 年頃までよく使われた言葉で今は死語に近いと言われている。

この店の名物と言われるミルクシェークを注文したがフロートのように凍らせてあり、大変美味であった。

残念ながらこの店一体も駅前Bブロックと呼ばれる再開発の計画地に位置しており、この店もこの形としては消える運命にある。

今後、全国で愛友市場のようにありのままの昭和レトロな街は消え、豊前高田のような(作られた?)街は増えていくのであろう。

広島で唯一といってもよいほんとうの昭和レトロな街が消えてしまうのが残念でたまらない。



帰りに立ち寄った純喫茶



名物のミルクシェーク

